

公益財団法人 日本中国国際教育交流協会

【2018年度の歩み 会報第25号】



■派遣

■受入

■支援

■研究等助成

第17次教育訪中団

第3回日中音楽教育交流会

第5次宋慶齡基金会教育交流代表団

東平県音楽教育支援

第7回ホームステイ（山梨）

第4回日中教育文化交流シンポジウム

第14回日本語作文コンクール

2019年3月発行

目 次

■巻頭言 公益財団法人日本中国国際教育交流協会 代表理事 黒田文男	2
■第17次教育交流訪中団・第3回日中音楽教育交流会（教育交流・派遣事業）	3
(1) 実施要項	3
(2) 参加者名簿	4
(3) 見学・研修報告	5
(4) 第3回日中音楽教育交流会	11
(5) 訪中団感想文	12
■第5次宋慶齡基金会教育交流代表団（教育交流・受入事業）	23
(1) 代表団受入計画案	23
■山東省泰安市東平県音楽教育支援（教育交流・支援事業）	24
(1) 2018年度教育支援に関する協定書	24
(2) 東平県音楽教育支援報告	25
(3) 東平県音楽楽器寄付報告	26
■第7回教育交流ホームステイ in 山梨（教育交流・研究等助成事業）	27
(1) 実施要項	27
(2) ホストファミリー・留学生名簿	28
(3) ホストファミリーからの報告	28
(4) 留学生からの報告	31
■第4回日中教育文化交流シンポジウム（教育交流・研究等助成事業）	37
(1) シンポジウム実施計画	37
(2) シンポジウム内容報告	38
■第14回日本語作文コンクール（教育交流・研究等助成事業）	42
(1) 教育賞受賞作品	
「流行語からの発信」	劉 玲（華東師範大学）
「日本の「中国語の日」に私ができること」	邰 華静（青島大学）
■資料	45
(1) 会報「共生力」 28号、29号	45
■機関関係	49
(1) 2017（平成29）年度事業報告	49
(2) 2017（平成29）年度事業・会議	50
(3) 2018（平成30）年度事業計画	52
(4) 2018（平成30）年度収支予算書	53
(5) 2018（平成30）年度役員・評議員・公益事業審査員名簿	55
■協会の歩み	56
■編集後記	表紙3

■表紙写真

【左上】 第17次訪中団（関係者記念写真）

【右上】 第3回日中音楽教育交流会（研究会の様子）

【左下】 第7回ホームステイ in 山梨（参加者・ホストファミリー記念写真）

【右下】 第4回教育交流シンポジウム（関係者記念写真）

巻頭言



公益財団法人日本中国国際教育交流協会

代表理事 黒田 文男

公益財団法人日本中国国際教育交流協会の事業に対しまして、日頃より多くの方々の励ましやご支援を賜り心から御礼申し上げます。

民主主義の基本的理念のひとつに自助を前提にした共助・公助の考え方をどこまで共有するかということがあります。又、其々の歴史・宗教を背景にした国の成り立ちの中で人々の生き方の違いを尊重することは最も大切にされるべきことだといえます。

日本と中国及び韓国の関係は、一衣帯水の地、「引越し」できない親戚のような国同士であります。互いの違いを認めつつ仲良くしていくことはごく自然であります。

そのためには、人と人の交流を前提にした信頼関係を常に醸成しようとする行動が必要となります。

当会と中国宋慶齡基金会との共同プロジェクトは、まさしく国を超えての人と人の交流であるとともに、そこから得られる教育成果には大きなものがあります。

一方、日本と中国の若者意識に焦点を当て、両国の歴史性をふまえた「日中教育文化交流シンポジウム」は、今年度は第4回を迎えました。日本へ留学している中国の青年、日本の若い教職員が沢山参加してくれました。パネラーの発言にからめて会場から真摯な意見が発表されました。今後、日中の懸け橋となる若者同士の交流は、互いの国の歴史を直視し、その上で、自分たちがどの様な役割を担えるかという漸進的な認識を生み、大いに成果を上げたと感じています。小さな交流会ではありますが、日中友好の未来を担う人たちの思いを大切に、これからもより良いものにしてまいりたいと考えています。

日本と中国、「明日を担う子どもたちの健やかな成長」のために、「人と人の交流」をより密にし「日中友好」の一助になれるよう努めてまいります。

当会は、教育の振興を目的とした公益財団法人であります。

今後とも、多くの都道府県の教育関係者の方々のより一層のご支援を賜りますことを深甚よりお願い申し上げます。

第17次教育訪中団（教育交流 派遣事業）

第17次教育訪中団は、9月27日（木）から30日（日）までの日程で、北京市・泰安市（東平県）・青島市で行いました。各県より12名の参加があり総勢14名で実施しました。中国側の受け入れは、中国宋慶齡基金会でした。北京では、基金会が昨年完成させた「中国宋慶齡青少年科技文化交流センター」の見学と表敬訪問、そして今後の取り組みについての打ち合わせを行いました。山東省泰安市東平県では、東平県教育局の受け入れで、東平県の小学校で視察及び授業参観、そして「第3回日中音楽教育交流会」を実施することができました。また、青島市の見学は、古代から近現代に至る中国と日本との交流の歴史という観点から、青島博物館・青島ドイツ監獄旧址博物館・五四広場等を中心に史跡・資料等について研鑽を深めました。今訪中は、日中友好条約締結40年という歴史的節目に当たる年という意味も含め、教育を中心に未来指向で日中関係をしっかりとらえるという意味で、大いに意義がありました。



山東省泰安市東平県夏謝小学校見学



第3回日中音楽教育交流会

（1）第17次訪中団実施要項

- | | | |
|---|---------|--|
| 1 | 目 的 | 日中の教育交流
・中国宋慶齡基金会と共同プロジェクトについて意見交換をする。
・中国宋慶齡基金会の最新施設を見学する。
・中国宋慶齡基金会との共同プロジェクトによる、山東省泰安市東平県での第3回日中音楽教育交流会の実施と、音楽教育支援の成果についての検証を行う。
・古くからの経済発展都市である山東省青島市についての見聞を深める。 |
| 2 | 実 施 日 | 2018年9月27日（木）～30日（日） |
| 3 | 方 面 | 中国（北京市・泰安市・青島市） |
| 4 | 参 加 人 数 | 14名（協会役員・各県教職員・参加希望者） |
| 5 | 日 程 | 中国宋慶齡基金会への訪問、山東省泰安市東平県の教育視察研修、現地研修（山東省青島市）
第1日目：27日（木）
羽田発→北京着
中国宋慶齡基金会を訪問（幹部・担当者との話し合い及び宋慶齡基金会青少年科技文化交流センターの見学）
高速鉄道で山東省泰安市へ移動
泊＝泰安市内ホテル
第2日目：28日（金）
専用バスで東平県へ移動
山東省泰安市東平県学校視察（夏謝小学校・東平州城道孫崗小学校・東平実験小学校）
※協会が教育支援を行った学校での音楽授業の参観
第3回日中音楽教育交流会（東平県の先生方及び東平県教育局の方々との交流会）
泰安市から高速鉄道で青島市へ移動
泊＝青島市内ホテル |

第3日目：29日(土)

青島市内見学（青島市博物館・迎賓館・青島ドイツ旧址博物館・天主堂・中山路散策・青島ビール工場）

泊＝青島市内ホテル

第4日目：30日(日)

青島市内見学（五四広場他）

青島発→成田

6 経 費 ・第17次訪中費用（羽田から中国そして成田の交通費・食費・宿泊費）については協会が半分を負担する。

7 第17次訪中団担当責任者

日国際教育交流協会責任者 赤岡直人業務執行理事（秘書長）
 中国宋慶齡基金会責任者 劉 穎所長（基金会基金部項目総合所）
 山東省東平県教育局責任者 史 桂玲主任（東平県教育局学生出資援助センター）

(2) 第17次教育訪中団参加者名簿

	氏 名	所 属	役割等
1	黒田 文男	協会代表理事（元静岡県教職員組合中央執行委員長）	団長
2	金丸 徹	協会評議員（山梨県教職員組合執行委員長）	副団長
3	朽見 誠二	協会理事（教職員共済協専務理事）	副団長
4	小山 悟	協会評議員（日本教職員組合中央執行委員）	
5	政金 正裕	協会監査（神奈川県教職員組合執行委員長）	
6	田中 正志	協会公益事業審査委員（弁護士）	
7	大石 茂生	静岡県教職員組合教育研究所教育局所長	
8	大久保 徹	千葉県教職員組合執行委員	
9	小串 吾郎	山梨県教職員組合副執行委員長	副秘書長
10	岡村 淳志	愛知県教職員組合執行委員	
11	小林美奈子	三重県教職員組合書記次長	
12	沢田 智文	静岡県教職員組合中央執行副委員長	
13	渡邊 勇一	茨城県教職員組合副執行委員長	
14	赤岡 直人	協会業務執行理事（元山梨県教職員組合執行委員長）	秘書長

第17次教育訪中団の中国側担当者名簿（学校見学・交流会参加）

中国宋慶齡基金会			
1	趙 賓	基金部公益項目所副所長	受入責任者
2	袁 振雅	基金部項目総合所項目官員	受入担当
3	張 大鶴	契約通訳	通訳
山東省泰安市東平県教育局			
1	史 桂玲	学生出資援助センター主任	受入責任者

第17次教育訪中団受入中国宋慶齡基金会会见者名簿

1	杭 元祥	中国宋慶齡基金会常務副主席	
2	唐 九紅	中国宋慶齡基金会基金部部长	
3	劉 穎	中国宋慶齡基金会基金部公益項目所所長	

(3) 見学・研修報告

●宋慶齡青少年科技文化交流センター見学報告

人口13億人を超え、世界第1位の人口を誇る中華人民共和国。急激に発展を遂げた都市部と昔ながらの農村部との貧富の差が激しいことはよく知られているところではないでしょうか。15年ほど前、中国の広州に住んでいたこともあり、今次の教育訪中団として参加させていただく機会を与えていただいたことに感謝すると同時に、中国のその後の発展がどのようなものかを実際にこの目で見て、この耳で聞いて、五感すべてを使って感じられることに嬉しさを隠せませんでした。

到着初日に訪れたのが、「宋慶齡青少年科技文化交流センター」でした。この施設は、中国と世界を結ぶ次世代育成のため、長い歴史の中で確立されてきた中国固有のパーソナリティと世界的視野に立って先を見通すための国際文化・国際標準等を理解し、その両者をより良く融合させることを目的に建設されたそうです。言わば、幅広く世界で活躍できる中国人育成のために巨額な資金を投じて建設された教育文化施設と理解すればよいのかもしれません。

圧倒されるほどの大きな建物、近代的なその外観は設立目的や「宋慶齡青少年科技文化交流センター」の名に恥じない立派な建物でした。また、その建物を囲むようにして幼稚園や自然植物園や球技場なども併設されており、総敷地面積は83000㎡と、東京ドーム2個分に匹敵するくらいの広さだそうです。都市部にありながらここまで広大で、開放的な敷地を用意できるのですから、この国の世界進出を見据えた教育にかけの気概を感じずにはられません。入館後、私たちの目に飛び込んできたのは、多くの異年齢の子どもたちが、演劇やダンスの練習に励んでいる姿でした。本番用の衣装をまもって練習する団体、体育着で汗を拭きながら練習に励む団体とそれぞれでしたが、日本の子どもたち同様、キラキラと目を輝かせながら一生懸命に練習している姿が印象的でした。また、入館一步目から「芸術文化創造」を感じた私たちでもありました。

上層階へと移動すると、そこには各ジャンルに分けられた部屋がいくつも設けられていました。中国古来の文化を中心とした学習スペースを見学させていただきましたが、どの部屋もとてもきれいに整えられていました。もちろん設備だけでなく、学術指導者として中国音楽学院・首都師範大学・北京大学等々、一流の大学からも講師を招いているとのことで単なる体験にとどまらず、幼い頃から本物に触れさせたいとの想いや願いを強く感じることができました。

我が国でも、「教育格差」が叫ばれはじめてどれだけ経過するのでしょうか。今回、見学させていただいた施設はとても素晴らしく、驚きの連続ではありましたが、この施設を利用できる子どもたちはごく僅かなのだろうか

…と、車中からの街並みを見ながらふと思ってしまいました。幼い頃からの英才教育で、教育もスポーツも一部のエリートを育て上げることが注目されがちな中国ですが、このような施設をより多くの子どもたちが利用でき、真に教育文化芸術活動に生かされんことを願うばかりです。併せて、我が国の教育につき込む「情熱」も「予算」も全く足りていないことに改めて寂しさを感じました。他国を知ることは自国を知ることであります。今回、とても有意義な機会を与えていただいたことに心より感謝いたします。

（山梨県：金丸 徹）



●宋慶齡青少年科技文化交流センター見学報告

訪中初日、最初に訪れたのが「宋慶齡青少年科技文化交流センター（以下、センター）」でした。センターは、①体験館②芸術センター③幼稚園④劇場⑤ホテルから構成されていますが、その中でも、「体験館」はセンターの重要な機能を果たしているということでした。体験館はセンターの1階から4階を使っており、その面積は15000㎡、また屋外にも様々な緑地体験施設があり、その面積は83000㎡あるということです。

体験館では、「好奇心・想像力・創造力」をテーマに、体験すること、好奇心を刺激すること、想像力を育成すること、創造力を奮い立たすことの相乗効果で教育していくという目標を掲げて取り組んでいます。そして、先進的な理念、国際視野、国際文化などを身に付け、国際人としての視野を育てる側面と、中国人の知恵、中国の文化などを身に付け、中国人としての視野を育てる側面を融合させた体験学習をめざしているということでした。

1階では0～3歳児の教育、2階では7～18歳の少年の様々な体験プロジェクト、3階では3～7歳児の教育（様々なイベント）が行われています。今回見学させていただいた4階では、「琴の演奏」「詩歌の詠唱や漢字の習得」「漢方薬の調合も含めた中国医学」「古代軍事」「京剧の体験」「刺繍」「陶芸」「木工」をはじめ23のブースがあり、北京大学、首都師範大学中国国学教育学部、中国音楽学院のスタッフが指導にあたっているということでした。単に形だけを習得するのではなく、楽しく生き生きと体験する中で、伝統文化の体系、中国の文化や精神を理解するような指導をしているということでした。まさに温故知新、伝統文化の価値を発掘することで、未来にむけた新たな文化の創造につながるのだと感じました。

私たちが見学していたときも、ある団体が演劇あるいはダンスを練習していましたが、利用形態は様々で、学校の授業として校外学習で利用するケース、放課後に様々な団体が利用するケースがあるようです。



施設見学の前に、宋慶齡基金会常務副主席である杭元祥氏からお話を伺いましたが、本施設は政府から約11億元（日本円して約180億円）の投資を受けてつくられ、これについては、国家主席である習近平氏の力が大きいとのことでした。ただ、翌日に泰安市内の小学校を見学して、中国における経済格差による教育格差の大きさを改めて感じ、このセンターを利用することができる子ども・家庭・学校は、中国の中でもごく限られた人たちののだろうかと思いました。日本でも「子どもの貧困」が叫ばれて久しい状況下、経済格差に起因する教育格差は深刻な問題となっていますが、それでも、日本国内のどこに住んでいても一定以上の水準で等しく教育を受ける

機会は保障されています。今後も、日本の公教育をしっかりと守っていかなければならないと改めて感じましたが、そのためには、公教育に対してもっと予算をかけなければいけないと思います。少子化で労働人口が先細りしていく中、子どもが減っていくから教育予算を削ってよいということではないと考えます。未来を担う子どもの人口が少なく、その貴重な存在である子どもたちを取り巻く社会・家庭環境・教育環境には、複雑多岐に渡る課題が山積しています。今後は、これまで以上に「人づくり」、特に公教育に対して手厚く人的・物的予算を投じ、ゆたかで安定した公教育を確立していかなければいけない時代ではないかと思えます。

私は、今回初めて中国を訪れましたが、宋慶齡基金会への訪問、泰安市内の小学校訪問、音楽教育交流会、青島市内の視察、どれも大変実り多い体験をさせていただきました。日本中国国際教育交流会の皆様へ感謝申し上げますとともに、今後、微力ではありますが子どもたちの教育に還していきたいと思えます。

（山梨県：小串 吾郎）



●中国宋慶齡基金表敬訪問報告



訪中初日の9月27日、宗慶齡基金会を表敬訪問しました。基金会からは、杭元祥常務副主席、唐九紅基金部部长にご出席いただき、懇談が行われました。

懇談は、今年3月にオープンした宗慶齡青少年科技文化交流センターで行われました。まず初めに、杭元祥常務副主席から歓迎の挨拶がありました。

「長い間日本中国国際教育交流協会は、中国、日本の2国間の交流のために大いに貢献をされており、敬意を表したいと思います。2007年から協会のおかげで、河北省の易県と山東省の東平県で音楽教育等、多くの交流活動を行いました。中国と日本の友好交流を進めてくださっていることに、心から感謝の意を表したいと思います。」とご挨拶がありました。

杭元祥副主席の挨拶を受け、黒田団長は次のように挨拶しました。

「17次交流団を快く引き受けくださり、ありがとうございます。日本中国国際教育交流協会は、28年前に設立されました。私は20年間この協会に関わっています。変わらないのは中国の方々の懐の深さと人間味のある包容力で非常に感心しています。国同士の関係は、基本は人間と人間の付き合いだと学ばせていただいています。28年前に田中一郎会長が設立した理念は東アジアの子供たちに夢を与えること、そして東アジアの国々が平和に交流することでした。その設立の趣旨を継続していかないといけないと考えています。来年は宗慶齡基金との交流が10年になるので、皆さんと協議させていただき、ご指導いただければと思います。」と挨拶しました。

その後、杭元祥副主席から次のような挨拶がありました。「今年は中国と日本の平和友好条約40周年なので交流協会の皆さんを迎えることは有意義なことだと思っています。私たち宗慶齡基金会は日本とのかかわりが深いです。孫文先生も宗慶齡自身も日本を視察したことがあります。これからもぜひ交流を強め、そして協力関係を深め、民間交流が一層盛んになるよう頑張りたい。」と述べられました。

最後に団から杭元祥副主席に記念品を贈り、基金会からは宗慶齡の本が贈られました。

懇談は、宗慶齡基金会の温かな歓迎や細やかな心遣いもあり、和やかな雰囲気で行われました。お互いの挨拶のなかで、交流協会と宗慶齡基金会との交流を今後も深めていくこと、日本と中国の教育交流を更に進めていくことを確認し合うことができました。

（日本教職員組合：小山 悟・千葉県：大久保 徹）



●青島市内研修報告

人生で初めて青島を訪れました。もちろん中国自体も初めてでした。青島は、今までの中国のイメージとは大きくかけ離れていました。空は青く、清々しい風が吹き、とても過ごしやすい町であると感じました。青島に来て、もっとこの町のことを知りたい、いろいろな場所を訪れてみたいと思いました。そんな気持ちにさせてくれた青島で、見学することができたいくつかの施設について報告させていただきます。

【青島市美術館】

「なんて大きいんだ！」最初に青島市美術館を見たときに、このようなありきたりな感想しか出てこないくらいに大きな美術館でした。駐車場から入り口までも遠かったのですが、遠くから見ても大きい。近くに寄ってしまうと美術館の全景が入らなくなってしまうので、遠く離れた位置から写真を撮りました。入り口に到着すると、早速手荷物検査。中国では、日本と違って至るところで手荷物検



査が行われます。日本では空港でしかほとんど見ないと思います。開封された飲み物の持ち込みは禁止されているのですが、検査官の前で一口飲めば大丈夫というガイドさんの話を聞き、恐る恐る実践してみました。結果は、無事に通過することができました。言葉が通じないこともあり、少しのことでも緊張します。中に入ると幼稚園らしき子どもたちが見学に来ていました。こんなに小さい子たちに理解ができるのだろうかと思いました。小さなころから自国の歴史や文化にふれることで、自分の国に誇りをもてたり、真剣に考えたりするようになるのではないかと思います。自分は小さな頃から美術館に行くという考えがなかったので、とても驚きました。

館内もとても広く、たくさんの展示物がありました。日本の美術館でも展示してあるようなものがあり、やはり日本の文化というものは中国から渡ってきたのだということを感じました。また、青島がドイツや日本に侵略・占領されていた歴史についても詳しく知ることができました。日本ではあまり扱われることのない侵略の歴史。自分は何も知らなかったのだということを感じました。戦争は悲惨なものだということ伝えることで、戦争

のない平和な世界につながると感じました。広い館内、たくさんの展示物をととても親切なガイドさんが説明してくれました。すべてを見終わったときには、足は棒になっていました。ここでも中国の大きさを感じることができました。

【青島ドイツ監獄】

青島に来るのも初めてですが、監獄に入るのも初めてでした。外観を見ると、西洋風の立派な建物だと思いましたが、細かく見てみると窓に格子がついていたり、高い塀が備わっていたりするなど、監獄として使われていた名残がありました。建物としてはいくつか残されていて、資料館として歴史を伝えているものもあれば実際に牢屋に入ることができるものもありました。

監獄の中には当時尋問や拷問をしていた部屋があり、なんともいえない雰囲気がありました。また、日本が占領していたときに拡張された地下の水牢も残されていました。現代では考えられないようなことが行われてい



たとえ、胸が痛みます。

他にも天主堂や青島ビール工場の見学をしました。中国にいながらドイツの雰囲気も味わうことができる青島。ぜひまた来たいと思いました。

(愛知県：岡村 淳志)

青島は、とてもきれいな街です。中国の「大都市」の多くががそうであるように近代的なビルが建ち並び人々が熱気にあふれて街を行き来しています。公園もよく整備され、ちょうど日曜日ということもあり朝は、ジョギングやストレッチに励む若者からお年寄りまで多く見かけました。(残念ながら、太極拳にいそむ姿は見ることができませんでした) 街中の道路も、清掃が行き届いていて私の印象にある中国の街とは、ひと味もふた味も違った雰囲気もありました。

時差なのか加齢なのかわかりませんが、早く目が覚めてしまったので、朝食前に近くの海を見に散歩に出かけました。日本では、まだ残暑があったり、ちょうど台風が近づいていたかとしていた時期ですが、風は強かったものとても気持ちのいい朝でした。

海沿いの公園で人だかりがしていたので吸い寄せられるように近づいていくと、公園の片隅で、高齢の女性が魚を売っていました。魚の種類はわかりませんでしたが、日本で言うボラのようでした。

まわりに集まった人たちと値段交渉なのか談笑なのかわかりません

でしたが、日本人からすると激しいやりとりを続けています。驚いたのは、その魚は、すぐ後ろの海で息子(確かめたわけではありませんが)が投網を打って捕っていたことです。(写真の後ろで網から魚を外しています)もう、産地直送・新鮮そのものです。大胆な行為にびっくりです。私は、こっそり撮影に成功しましたが、撮影を断られた方もいたようです。理由は想像に難くありません。



青島といえば、やはりビールです。当然、視察の最後は、青島ビールの博物館見学とビール工場見学に試飲となりました。博物館は西洋式建築で趣もあり、歴史を感じさせる非常に美しい建物です。青島はドイツの占領下にあった時代もあり、迎賓館や天主堂など、ドイツの影響を受けている建造物が多くあるそうです。そうか、だからビールなんだと納得しました。個人的な感想ですが、日本で飲む青島ビールはマイルドで飲みやすいのですが、やや味がうすいと思っていました。工場で飲んだ、(おそらく他では飲めない)純生(?)ビールは、味も苦みもしっかりあり絶品でした。

青島はとてもきれいな街でした。また行ってみたいとも思っています。ただ、中国訪問から戻ると、いつも思うのは、中国の歴史、とりわけ日本との関係に私自身があまりにも無知なことです。ドイツの占領下にあった青島を日本が第一次大戦に乗じて略奪し、中国内陸部侵略への足がかりとしようとしていたそうです。青島の歴史博物館他、今回の視察で学びました。今度は、事前学習を深め、改めて青島を訪れたいと思います。

(神奈川県：政金 正裕)

●東平県学校訪問報告

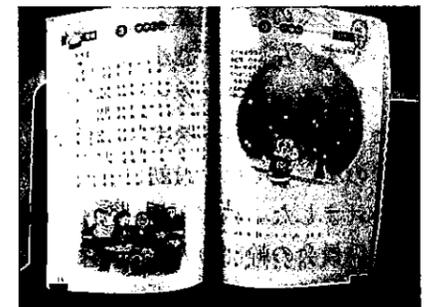
＜夏謝小学校＞

9月28日、泰安市内の宿泊地を出発して、広大な農村地帯をバスで1時間の場所。沿道には収穫したとうもろこしがどっさり干し広げられていた。とうもろこしは、とてもきれいな濃い黄色をしており、山と積み上げられていた。その下に敷きつめられた絨毯も見事だった。ただ、沿道で作業をしている地域の人々の姿を見かけることは、あまりなかった。

もとは1951年に設立されていた学校が、移転し名称も変わって2011年夏謝小学校として正式に誕生。保護者に送り迎えをしてもらいながらこの校舎へ通う子どもたちは、幼児教育と小学校教育をうける年齢の子どもたちである。渡された平面図によると、敷地内には、サッカー場、バスケットコートなどの運動ができる設備と、校舎内には音楽室をはじめ化学教室、メディア室、図書室やカウンセリング室等が整っている施設となっていた。教育目標は、「子どもたちの健全な育成」。

学校の西方には集落があり、東方には田畑が広がっていて、6つの村から通学するにはとても便利なところに位置する学校。中学校も近くにあると聞いた。

2年生の音楽の授業を見学した際には、1つの教室に20人の児童が学習していた。電子オルガン(キーボード)1台を2人の児童が共有して練習していたが、譜面台がなく教科書を置くと鍵盤が隠れてしまうので、不都合だろうと思った。教科書を見せてもらおうと、日本の小学校で使用している音楽の教科書と雰囲気はとてもよく似ているのだが、五線譜ではなく、指番号と音の長さが表示された楽譜だった。わたしたちが見学させてもらっているとき、児童は個別で練習をしているところだった。



＜東平州城道孫崗小学校＞

夏謝小学校から出発して、さらに1時間ほど行くと、東平州城道孫崗小学校に到着した。2002年に設立され、102人の児童に10人の教育職員が在籍している。「優美で閑静な環境のもとで、家庭と学校が連携して、子どもたちにより教育習慣と道徳教育、健康な保健体育を行っている」と綱領にある。

参観した音楽の授業では、教員が伴奏し、児童が指揮、そしてほかの児童は教科書を見ながら合唱をしていた。教員が子どもたちに笑顔で評



価値をしているのが、とても印象的だった。

教室の後方には、教育支援として贈った楽器（木琴）が並べられていた。

夏謝小学校よりも教育設備として充実しているなど思った。その一つとして、黒板の中央を開くと、電子黒板になっていた。このことから、授業において情報通信技術（ICT）の活用を図っていることがわかった。

東平州城道孫崗小学校での別の教室では、算数の授業を見学。子どもたちがすすんで発言するようすや発言後に学級の仲間や教員からの

拍手や励ましの言葉がけがなされるようす、そここの場面に活気のある授業を見ることができた。綱領に示されていた「子どもたちによる教育習慣」が具現化されていることを感じた。

（茨城県：渡邊 勇一・三重県：小林美奈子）

●第3回日中音楽教育交流会報告

訪中2日目（10月28日）、午前中は、3つの学校の訪問・視察でした。3校目の視察校は、「東原実研小学校」でした。

この小学校は、山東省東平県にある小学校で、規模は大きく、校舎、グラウンド等は立派なものでした。玄関では、多くの方々が私どもを出迎えてくれました。玄関をくぐって最初に私の目に飛び込んできたのは、玄関に入ってすぐ左にあった小部屋でした。その部屋には、たくさんのモニターがあり、学校のいたるところの様子がリアルタイムでモニターされていました。日本の小学校ではなかなかお目にかかれぬ設備でした。校舎内に入ると、廊下や階段、教室等は日本の学校と基本的には同じ造りでした。

この小学校では、最初に私どもと、宋慶玲基金会、東平県教育局、実研小学校の音楽担当の先生方と交流会が行われました。私どもがバスで着いた時の出迎えの人数、この交流会への参加者の人数等、日本でいうところの教育委員会の幹部の方々の出席と、日中国際交流協会への尊敬と敬意の念の表れではないかと感じました。第17次日中交流という長く丁寧な積み重ねと相互理解によるものと思いました。

この交流会の中で、印象に残っていることは、東原実研小学校の音楽担当の先生からの質問です。「日本では音楽の先生は、国からどのように評価されていますか。」「国が音楽の先生を評価する際には、何か基準のようなものがありますか。」という質問でした。私たちのような教育関係者が他国の学校を視察した際、このような質問をすることはないように思います。また、国内で他県の小学校を訪問した際にも、このような質問をすることはないように思います。最初の質問でしたので、少々驚きましたし、中国という国の体制や教育の有りように、その背景があるのかと考えさせられました。

全体の意見交換が終わった後、若干の休憩時間に、私のところへ一人の先生が来られ、「日本には伝統的な楽器が多くあると思うが、そういう日本の伝統的な楽器を子どもたちに教えていますか。」「日本の伝統的な楽器を子どもたちに教えるようなプログラムは整備されていますか。」という質問がありました。私は、音楽のことは詳しくわからないので、周りの方々に聞きながら答えました。彼女は、日本の伝統的な楽器、特に「お琴」に興味を持っているようでした。彼女は、「琴の音色は、気高く、凜としたものを感じる。日本の伝統的な楽器の代表だ。」「宮城道雄が作った『春の海』は、すばらしい。」などと熱く語ってくれました。私に、こういうことへの造詣があれば、彼女の熱意にもう少し応えられたらと思い、申し訳なく思いました。余談ですが、通訳さんを通して、「私は、中国の伝統的な楽器である胡弓が大好きですよ。」「胡弓の心に染み入るような音色が好きです。」と伝えすと、とびきりの笑顔で、「私は胡弓が得意ですから、今度お聞かせしますよ。」と話してくれました。実現は難しそうですが、民間の草の根レベルでの交流があることは素敵なことだと感じました。

交流会が終わると、昼食でした。昼食は、部屋にたくさんのバラエティーに富んだ中華料理が並べられ、buffet形式でした。このスタイルも、日本の学校では考えられないものでした。食べ物を取りにいき、何をいただこうか見ていると、「これは、おいしいからどうぞ。」と勧められたり、私がお皿に盛った料理を見て、親指を立てにこっとしてくれたり楽しいひと時でした。親指を立てにこっとしてくれた先生に聞くと、「それは、みなさんの口に合いますよ。たくさん食べてくださいね。」ということでした。

昼食を終え、東原実研小学校の訪問・交流が終わりました。子どもたちの学習している様子を見ることができ

なかったことが心残りでしたが、中国の小学校の一つを自分の目で見ることができ、また、中国の先生方の生の声を聞くことができ、私自身の見聞を広めるには十分なものでした。東原実研小学校を含め、3校の学校訪問を通して、いろいろなことを考えさせられました。特に、施設・設備の違いは何とかならないものかと感じましたし、学校にかかる予算的なものについてもどうなっているのかと思うところでした。



東原小学校での交流会

帰日も私どものバスを多くの方々が見送ってくれました。見送ってくださる皆さんの笑顔と見送られる私たちの笑顔に、この交流の意義を見つけたような思いでした。この交流が、18次、19次とさらに歴史を重ねられることを願いながら、東原実研小学校を後にしました。

（静岡県：大石 茂生・静岡県：沢田 智文）

（4）第3回日中音楽教育交流会

東平県における「第3回日中音楽教育交流会」は、東平県及び東平県教育局の全面的な協力のもとに28日（金）に青峰山実験学校にて開催されました。交流会に先だって、2015年から本年までの4年間に、協会が教育支援（音楽教育）をおこなった小学校の中から2校（接山鎮夏謝小学校・東平州城街道孫崗小学校）の音楽授業参観をおこないました。学校訪問後、そのことを踏まえながら音楽教育についての交流会を開きました。交流会には、1・2回の音楽交流会の参加者も出席し、多くの意味ある質問や意見が交換されました。

交流会内容

- ① 日時 2018年9月28日（金）8：50～13：00
- ② 場所 接山鎮夏謝小学校、東平州城街道孫崗小学校、青峰山実験学校
- ③ 日程 8：50～9：20 接山鎮夏謝小学校授業参観
10：00～10：30 東平州城街道孫崗小学校授業参観
11：00～13：00 青峰山実験学校にて第3回日中音楽教育交流会

学校見学参加者名簿（引き続き交流会へも参加）

山東省泰安市東平県			
1	董 在龍	佛山中学党支部書記	
2	張 鵬	教育局学生資助中心干部	
3	張 小南	教育局教育志辦干部	
4	李 衛東	接山鎮副鎮長	
5	李 建章	州城街道党工委委員	
6	陳 士東	接山鎮教育辦室主任	
7	宋 濤	州城街道教育辦室副主任	
8	何 公峰	接山鎮夏謝小学校校長	
9	劉 国強	州城鎮孫崗小学校校長	

第3回音楽教育交流会及び昼食会への出席者・参加者名簿

山東省泰安市東平県			
1	程 鵬	人民政府副県長	
2	王 憲海	人民政府辦公室副主任	
3	何 泳	教育局党委書記・局長	
4	劉 祥同	青峰山実験学校校長	
5	呉 緒柱	第二実験小学校校長	第2回参加者
6	李 冉冉	老湖鎮中心小学校音楽教師	第2回参加者
7	史 曉涵	芸術中学校音楽教師	第2回参加者
8	張 媛	第四実験小学校音楽教師	第2回参加者
9	李 静	東原実験学校音楽教師	第1回参加者
10	宋 贇	青峰山実験学校音楽教師	第1回参加者
11	趙 夢潔	清河実験学校音楽教師	
12	翟 明菲	佛山小学校音楽教師	
13	王 艶	実験小学校音楽教師	第1回参加者
14	杜 衍霞	第三実験小学校音楽教師	第1回参加者
15	李 志偉	第四実験小学校音楽教師	第1回参加者

(5) 訪中団感想文

改めて子どもたちに学ぶ

山梨県：金丸 徹

日本中国国際教育交流協会第17次訪中団として、私たち14名は北京国際空港に降り立ちました。成田空港で初めて顔を合わせ、名刺交換くらいはしたもののお互いの名前も完璧ではないまま始まった今回の訪中。空港に着くなり、私たちを待ち受けていたのは横一列に並ぶ複数の指紋認証機械でした。「徹底的に管理させていただきまます」と言わんばかりの指紋認証であり、中国政府の姿勢と、ここは外国であるということを強く感じさせられた一瞬でもありました。自分のスマートフォンにも指紋認証機能が備わっていますが、それさえも使ったことなく、指紋を登録するという非日常に責任の重さを感じた今回の訪中スタートであったことを今でも鮮明に記憶しています。しかし、この指紋認証の時間が、互いに機械の扱い方を共有し合い冗談を交わす時間ともなり、私たち訪中団の距離を一気に近づける役目を果たしてくれたのです。さあ、いよいよここから本格的な中国国内を視察する旅のスタートです。

私は、15年前に在外教育施設派遣教員として3年間、中国・広州にお世話になっておりました。ですので、ある程度、中国という国のシステムも言葉も知っているつもりでいました。しかし、15年という時間を埋めるには、それ相応の時間が必要となりました。なにより、当時はどっぷり中国語の中で生活しておりましたので、耳から入る中国語も、口から発する言葉もいたって自然でした。しかし、今回ある程度できるかな？なんて甘く考えていた自分が恥ずかしく思えるくらい、全く聞き取れないのです。聞き



取れないどころか、話したい言葉（単語）も思うように出てこないのです。諦めて話すのは挨拶くらいにしておこうと決めた私に、試練は待っていました。泰安市に向かう高速列車の座席が私の隣だけなぜか現地の方。しかも二人掛けの席。座るやいなや隣の女性が「コンセントがどこかにないかしら？」と聞いてきたのです。咄嗟の事で思いがけないことでしたので、多分それっぽいことを聞いてきたのだと判断しました。二人であちこち探している間に発見。そこから2時間いろいろな話をさせてもらいました。すると不思議なことに次第に耳が慣れ、徐々に当時の感覚を思い出してくるのですから人間能力ってすごいものですね。

さて、そろそろ本題に入ります。今回、教育施設を中心に訪問させていただきました。中でも東平県の学校視察は、大きな感動をいただくことができました。小学校2年生でしょうか。大きな声でかけ算九九ののほり算くんだり算の練習をしているのです。寒々とした教室。コンクリートの床に平然と机が並べられ、冷暖房の設備もなく、その中で子どもたちは瞳と口を大きく開けて何度も何度も練習しています。席を立つ子も、外を見ている子もなく、ひたすら暗唱していました。途中、先生が一人の男の子を指名しました。自信なさげにその男の子が答えると大正解。教室中、その子を褒め称える拍手とかけ声が響き渡りました。照れくさそうにしている男の子も、周りの友達も、そして先生のだれもが笑顔でした。国や教室環境、生まれ育った環境は違えども、子どもたちは皆『できるようになりたい』と願い、『できた』という喜びは全世界共通であることを改めて感じました。音楽の授業も同様、我が財団から送り届けたキーボードの前に座り、黙々と練習しています。二人で一台を使うという条件ですが、それでも嬉々として練習に励む姿はなんとも微笑ましく、『できるようになりたい』と願う子どもたちの姿がそこにもありました。私たちは、子どもたちの『できるようになりたい』にどれだけ応えてあげら



れているでしょうか。矢継ぎ早に示される教育施策の数々。多忙で窮屈な教育環境下でありながらも、子どもたちの『できるようになりたい』にしっかりと応えられる教職員でありたいと強く感じました。第17次訪中団の1人として、出会えた皆様との縁を大切に、子どもたちの願いに応えられる環境づくりに微力ながら力を尽くしていきたいと感じました。

今回、このような素晴らしい機会を与えてくださり、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

第17次教育訪中団に参加して

大阪府：朽見 誠二

2018年の9月27日から30日にかけて、日本中国国際教育交流協会第17次訪中団の一員として、中国の泰安市と青島市を訪問させていただきました。久方ぶりの海外旅行でしたのでいろいろと心配もしていましたが、すばらしい天候と中国の皆さんの歓待と、そして何より、楽しく陽気で親切心あふれる団員メンバーの皆様のおかげで最高の旅をすることができました。

私は、事前にいただいた実施要項で宋慶齡さんの名前を見て、聞いたことのある名前だと思ってネット検索を試してみました。そして、自分が知っていたのは宋美齡さんだったことに気づき、宋三姉妹がそれぞれの道を歩みながら中国の歴史を大きく動かしていたことに驚かされました。一人はお金を、1人は権力を、1人は国を愛したとの記述がありました。お金と権力を愛していたかについてはきちんと調べる必要があると思いましたが、宋慶齡さんが国を愛していたことは間違いなく感じました。日本中国国際教育交流協会が、その宋慶齡さんの名前を冠する基金会と共に事業を行っていることは、大変意義深く名誉なことだと思います。中国宋慶齡基金会の表敬訪問では、手厚くもてなしていただいていたことに恐縮の至りといった感でした。時間がなく、基金会の幼稚園を見学できなかったことは残念でしたが、施設全体のスケールの大きさに、中国が教育に力を入れるのを感じ取りました。

28日は泰安市の三つの小学校を訪問・見学しました。最初に訪問した夏謝小学校と次に訪問した孫崗小学校は、農村の一般的な小学校のようでした。周辺の様子もそう感じさせたのかもしれませんが、雰囲気と言うと昭和30年代を感じました。日本に比べて学校の規模が小さくクラスも少人数のようで、きめ細やかな教育ができるだろうと思いました。教育機器は結構進んだものを取り入れており、陸上競技のトラックや各種球技場も整備されて

いました。国際教育交流協会が贈った鍵盤ハーモニカを練習していたのは1年生ぐらいでしょうか。外国からのお客さんに少々緊張した様子でしたが、子どもの屈託ない笑顔は万国共通なんだろうと思いました。両校においてA4カラー刷りの学校を案内するチラシをいただきました。外部の人に我校を知ってもらいたいとの思いがあるのでしょうか。中国語が読めず写真を見るばかりですが、「打造魅力教師」の文字に教育にける熱意を感じます。

3つ目の学校は東原実験小学校で、前2つの学校とはまったく違います。実験校は最高・最先端の教育を求めて、お金をかけ優秀な教員を集めているようです。教員の皆さんとの意見交流では、日本のいいところを少しでも学ぼうとする意欲を感じました。ただ、教員の評価についてしきりに聞きたがっていたことが気になりました。教員評価は難しく、日本でもいろいろ試行錯誤しているところだと思えます。中国の制度や中国の教員がどう感じているのか、機会があればぜひ知りたいものです。交流の後、バイキング形式の昼食をいただきました。これが、一流コックが調理したかと思えるほど美味で大満足でした。聞けば、この学校の教員は毎日この昼食を食べているとのこと、子どもたちもバイキングだそうです。

29日は1日青島市を観光しました。青島といえば、ビール、ドイツ、第一次世界大戦が思い浮かぶ程度で、こんな素晴らしいところだとは思いつきませんでした。人口900万人ですから立派な大都会です。それでいて、街がきれい、景色がきれい、気候が良い、治安が良いときますから、観光客が押し寄せても不思議ではないところですが、観光客が多くないことも、またいいところの一つに加えられます。青島市博物館と迎賓館も素晴らしかったですが、強く印象に残ったのは青島ドイツ監獄旧址博物館です。中国にしてみれば、ドイツも日本も侵略に来た許されざる相手であろうと思えます。しかし、中国人ガイドの唐さんは、ドイツが美しい青島の礎を築いてくれたとむしろ感謝の気持ちを述べておられました。唐さんは監獄博物館で、日本が中国人に行った残虐行為を展示した部屋の説明を、小声で簡単に済ませたように感じました。

よく「未来志向」と言いますが、今、日本と中国はお互いに素直に「未来志向」を確認できる関係になれているでしょうか。まだ、日本と中国の間には難しい問題が横たわっていると思えますが、国際教育交流協会等が行っている民間レベルの交流を更に活発に行っていくことが、日中友好の発展前進につながっていくことと確信します。監獄博物館で日本人を相手に唐さんがしっかりと説明し、日本人がその説明をしっかりと聞くことができたようになった時、過去に日本人が中国で行った善行に対して、多くの中国人が感謝の言葉を述べてくれるのだと思えます。

最高の旅に参加することができました。関係するすべての皆様に感謝します。

第17次訪中団に参加して

東京：小山 悟

まずは、このような機会を与えてくださったことに感謝いたします。私にとって中国訪問は初めてのことであり、異文化に触れることができた経験は貴重なものとなりました。

東平県では、本協会が楽器を送った夏謝小学校と東平州城道孫崗小学校を訪問しました。音楽の授業では、子どもたちが電子オルガンの練習に真剣に取り組んでいました。協会の活動が現地できちんと役に立っており、今後も音楽を通しての交流が継続されていくとよいなと感じました。続いて都市部に位置する東原実研小学校を訪問し、東平県教育局や県内の音楽教師の方々とのディスカッションを行いました。音楽の授業で扱う内容や授業形態、免許制度などの日本の学校システム等に話題が広がり、両国の教育事情の違いについて考える時間となりました。しかし事情の違いはあれど、中国でも日本でも、教員が子どもたちのために何ができるかを常々考え、良い授業をするために努力していることは共通していました。子どもたちと接することの楽しさを共有することができたと思えます。

訪問した東平県内の地方に位置する2校と都市部の1校では、学校施設そのものが大きく異なっていました。経済事情の違いはあるかと思えますが、都市部と地方の格差は大きなものでした。今後、地方においても施設等の充実がされていく予定であるとのことでしたので、その差が少しでも縮小されるとよいなと思えました。日本でも、都市部と地方の格差が生じています。とりわけ教育格差解消のために私たちができることをしていかなければと再認識する機会となりました。

青島市の施設見学では、特に青島市博物館で歴史的背景を学ぶことができました。青島市発展の様子が詳しく解説されていました。その始まりの頃に日本が負の面でかかわっていたこと等を知りました。当時、現地の方々も日本のことをどう見ていたかを想像すると切ない思いとなりました。もしかしたら今でもその頃のことを引き継いでいる方々がいるかもしれません。現在の青島市は、街並みが整備され観光客が多数訪れる都市となっており、日本人にも寛大ですが、こうした背景があることを意識しておくことは大切なことであると思えました。

今回の訪中で大変有意義な時間を過ごすことができました。この体験を今後の活動に生かしていきたいと思えます。

訪中団に参加して

かながわ教職員組合連合：政金 正裕

今回、2回目の訪中団参加です。前回訪問時は、(パクリ) ミッキーマウスや冷凍ギョーザ事件などが報道された後、と言うこともあって、私の印象は決してポジティブなものではありませんでした。しかし、前回の訪問で中国という国の圧倒的なパワーや潜在力の大きさを感じました。

中国の教育予算は国防費の約3倍だそうです。(ちなみに日本は防衛予算より若干多い程度です) 経済発展とともに中国は今、教育に莫大な予算と力を集中し、教育の国際交流、留学を推奨し、グローバルな人材を養成することで、さらなる発展をとげようとしています。(正しいと思えます)

今回、山東省泰安市東平県の小学校2校を視察しました。そのひとつ、夏謝小学校は、泰安市から校外へとバスを走らせ約1時間30分、迎り一面トウモロコシ畑が広がる小さな村にぽつんとありました。

平屋建てが何棟か建ち、校庭も決して十分とはいえない広さでしたが、どこも清掃が行き届いており、私たち訪中団歓迎の思いが伝わってきました。この間、協会では音楽交流を続けてきたこともあり、音楽の授業に参観させていただきました。1年生のクラスでは、協会が寄贈した電子オルガンを2人1組で、ひとつのメロディを繰り返し練習していました。2年生のクラスでは、先生がキーボードで伴奏し、子どもたちが椅子(?)に座って歌っています。

いわゆる、田舎の学校なので、子どもたちの数も少ないですし、施設設備も十分とはいえない環境ですが、子どもたちの熱心な姿勢は、大変すばらしいもだと思いました。中国の学校のカリキュラムを全く知らない中ですが、前回訪れた上海の都市部の学校とは、施設設備は当然ですが、授業も大きな開きがあると感じざるを得ませんでした。大きな発展をとげている中国ですが、まだまだ経済格差や教育格差は大きいようです。今後もこの教育交流を通じて民間教育交流の輪を広げていく必要性を感じました。

子どもの成長を願い、教育に多くの予算とエネルギーを投入していくことは、無駄遣いではなく将来にわたって、経済的にも文化的にも必ず還元されるはずで、日本でもまだまだ、子どもの貧困が大きな課題です。この問題の解決に向けた取り組みをより一層すすめていく必要性も改めて感じた視察でありました。日本に稲作が伝わって、3000年。日本と中国のつながりは絶えることなく続いています。不幸な時期がほんの一時期あったとしても、こ



れからも隣人としてお互いを尊重し合っていきたいですね。

最後に、今回の視察に参加した仲間の皆さんと楽しく有意義な時間を共有できたことに、改めて感謝します。ありがとうございました。

日本と中国は兄弟

田中 正志

父(田中一郎)は言っていた。

「教育は未来につなぐ架け橋、希望だ。どこの国、民族でも教育はもっとも大切だ。日本と中国は兄弟。仲良くしなければいけない。日本と中国は、協力して、次の世代を担う子どもたちが十分な教育を受けられるようにしなければいけない。」などと。

こんな言葉を、私は父から聞かされて育ってきた。そして、父が日本中国国際教育交流協会を設立して、中国に何度も行き、中国の親しい友人がたくさんいるということを見聞きしてきた。

しかし、私は、その実態や内容を知らないまま、過ごしてきてしまった。今回、黒田代表理事、赤岡業務執行理事のおかげで、第17次教育訪中団に参加させていただき、教育交流がどのようなものか、この目で見る事が叶った。

北京では、宗慶齢基金会の青少年科技文化交流センターにて交流会議が開かれ、財団と基金会との親密な協力関係を実感できた。そのあと、センター内を案内されたが、その迫力、立派さに圧倒された。

次は、泰安市東平県の3つの小学校を視察したが、教育設備、規模の違いがすごかった。校舎をはじめとする教育設備の差は、都市と地方、貧富の差など、中国社会の現実を見せつけられた。だが、子どもたちが、熱心に授業を受けている姿が共通だったのがうれしかった。日本と中国の教育交流の必要さを痛感した小学校訪問だった。

今回の訪中では、中国の人達の熱烈な歓迎を受け、言葉はほとんど通じなかったが、心は通じ合っていることを実感できた。国と国との関係はどうであっても、人と人は仲良くなれる。友達になれる。兄弟のようになれると思った。教育を通じて、お互いの人がお互いの国や人を敬愛し、良き隣人として、向上し合えるように、子ども達に伝え、教えることが大切だとつくづく感じた。

私は教師ではないので、直接、子どもたちにこのことを伝えたり、教えることはできないが、日本中の先生に、そして中国の先生に実践してもらいたい。

教育を通じて、人と人との心の交流が大きく広がって、国と国とも兄弟のような関係になってほしいと思った旅だった。

訪中の後半では、青島市の歴史、文化、産業、生活などを見学したが、中国の他の街と違う欧米的な雰囲気の落ち着いた、きれいな街だった。もう一度来てみたい街の一つになった。

ところ変われば…を感じた訪中の旅

静岡県：大石 茂生

今回、思わぬ縁で、訪中の機会を得ました。黒田文男日中国際教育交流協会団長、鈴木伸昭静岡教組中央執行委員長のご配慮により実現したものでした。

訪中は、二度目で、一度目は25年ほど前、旧榛原町(現牧之原市)の中学校に勤務していた時、町の人づくり事業で派遣させていただきました。25年の時を経た中国、驚異的な経済発展を遂げている中国、習体制のもと世界で確固たる地位を築きつつある中国、近くて未知なる国、中国、そんな印象と興味をもっての訪中でした。

1日目の宗慶齢基金会表敬訪問では、建物の大きさ、建物内の豪華さに度肝を抜かれました。浅学な私は、宗慶齢さんという方のことは全く知りませんでした。途轍もない権力と財力をもった方であることは、建物を見て説明を聞いて想像することはできました。

2日目は小学校の訪問でした。3校を訪問しました。印象に残ったことは、施設・設備のあまりに大きい違いでした。近代的で豪華な学校、日本でいえば私が小学校のころのような学校、この差は埋めようもないものなのかと考えさせられました。

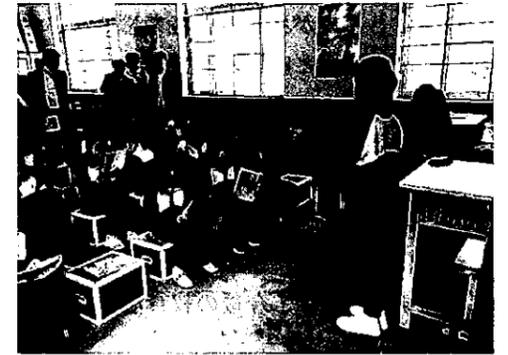
3日目、4日目は青島市の視察でした。自転車やバイクのような乗り物は全くと言っていいほど走っていません。片や、バスの車窓から見たこれでもかと荷物載せたバイクや軽自動車の車列は、私が映像でしか見たこと

のない50年、60年をさかのぼった日本の光景のように感じました。青島では、北京オリンピックのボート会場周辺を見学しました。大きく瀟洒なマンションらしき建物が並んでいました。一方、バス移動中に見た道路沿いの商店や民家は、平屋の質素なものでした。

今や世界に冠たる国へと発展・変貌している中国。国内に見られる衣食住の格差、同じ国でありながら、これをどう解決していくのか興味深いものがあります。同時に、同じ国でありながら、これだけの違い、ところ変われば…に驚嘆しました。

2日目、夏謝小学校、孫崗小学校の2校を視察しました。施設や設備は十分とは言えない環境でしたが、漢字や卓上ピアノを目を輝かせて学ぶ姿に、思わず頬が緩みました。目を合わせた子が、にこっと笑顔を返してくれたことが印象に残っています。ところが変わっても、国が変わっても、教育の果たす役割の大きさと大事さを感じました。

3泊4日の訪中、事務局である赤岡さん、山梨県教組の金丸さん、小串さんをはじめとして、各県の方々には大変お世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。短い間でしたが、とても仲良くさせていただき旧知の仲のような関係を持つことができたことは、大きな財産になりました。ありがとうございました。



歌を練習する子どもたち

第17次訪中団に参加して

千葉県：大久保 徹

訪中団へ参加するにあたり、事前に中国のことを調べようと思い、いくつかの本屋へ向かいましたが、ガイドブックの種類は近隣の国や都市に比べると少なく、情報を得にくいのが中国でした。自分の目で見て、様々なことを学び、還元できるようにしようと思い、出発の日を迎えました。

北京に到着し、まず感じたのは中国のスケールの大きさでした。北京首都国際空港内には、モノレールが走っていて、飛行機搭乗時に預けた荷物を取りに行くためには、これに乗車して移動しなければなりません。アジアで最大級の空港だということも納得の規模でした。また、北京から泰安に移動する際には高速鉄道を利用したのですが、駅のロビーは空港のようであり、想像を超える規模でした。また、この駅のロビーに入るには、金属探知機やエックス線検査を受けなければならず、治安維持に相当の労力を必要としていることも肌で感じました。北京市内は高層ビルが立ち並び、街中を走る自動車も多く、その発展に驚く一方で、交通渋滞の激しさや排気ガスの問題等、様々な側面があることもわかりました。

今回の訪中団では、様々な教育施設を見学しました。1日目に訪問した宗慶齢青少年科技文化交流センターは、中国の若者だけでなく、世界の若者が中国の文化等を体験できるようにと昨年7月にオープンした教育施設です。広大な敷地にあるこの交流センターは9階建てで宿泊施設もあり、定員300人の幼稚園も併設されていました。まさに中国の勢いを感じる教育施設でした。

2日目は、農村部にある学校2校(夏謝小学校、東平州城道孫崗小学校)と都市部にある研究校(東原実研小学校)を見学させていただきました。

農村部の学校は2校ともコンクリートでできた平屋建ての校舎で、壁のないトイレがありました。教材や教具も十分ではない環境ではありましたが、教員が算数や音楽の授業を行っている姿や児童が学習に励む様子は日本の学校と大きな違いはないように思いました。また、学校の開始時刻や授業時間、教科等、日本との共通点がいくつもありました。

農村部の学校の見学後に、都市部にある研究校に伺いましたが、そのギャップに驚きました。まず、校舎に入ると警備室のようなものがあり、そこにある巨大モニターには校舎内に設置した40箇所以上のカ



東平州城道孫崗小学校

メラ映像を映し出していました。また、学校は4階建て以上の近代的な建物で、農村部と都市部の違いを感じました。残念ながら授業の様子は見られませんでした。県教育局の職員や研究校の先生方と意見交換する機会をもちました。音楽の授業についての話では、工夫しながら授業を進めていることが窺えるとともに、授業に対する熱意を感じました。

この訪中団に参加して、教育に携わる人たちの思いは日本も中国も共通するところがあると思いました。また、私たち訪中団への歓迎や心遣いに、敬意と感謝の気持ちをもつとともに、中国に対する親近感も増しました。広大な中国国内では、地域差等の課題もあると感じましたが、その状況を私たち訪中団に見学させていただけたことに大きな意味があるように思いました。それは、これまでの『日本中国国際教育交流協会』の取り組みにより、信頼関係があることの表れだと思うからです。今後もこの信頼関係を更に強固なものにし、両国の教育の発展のためにお互い協力できたらと思いました。

最後に、多くの学びがあった今回の訪中団を企画、運営していただいた『日本中国国際教育交流協会』の皆様

に感謝すると共に、今後の教育活動で還元していきたいと思ひます。



東原実研小学校学校

成長に喜びを感じる者の雰囲気かににじみ出ていたからでしょうか。



と学校に通うことができている子どもたちの方が幸福であるに違いありません。そういった意味で、今後も中国の学校現場から学ばなければならないことがたくさんあるはずだと感じた4日間でした。

日本と中国を比べて

愛知県：岡村 淳志

中国の学校現場から学ばなければならないこと

山梨県：小串 吾郎

報告書にも書きましたが、初めての訪中でした。このような機会をくださった日中国際教育交流協会の皆様、そして、4日間の行動を共にしてくださった皆様には、貴重な体験・出会いをいただきましたことに心より感謝申し上げます。

1日目に北京首都国際空港に到着し、空港の大きさ（特にモノレールに乗って荷物を受け取りに行くこと）に驚き、それから4日間、見るものすべてに日本では考えられないスケールの大きさを感じ、国の勢いというか熱気のようなものを感じました。テレビ等で見る中国は、いつも曇っていて、たくさんの自転車が走っているというイメージでしたが、そのような自転車を見ることはありませんでした。しかし、工場等の排気や砂埃のせいでしょうか、常に曇っており、霧がかかって冴えない空模様であると感じました。

宋慶齡基金会への訪問、泰安市内の小学校訪問、音楽教育交流会、青島市内の視察と、4日間で本当に多くの学習の場をいただきましたが、中でも、2日目の泰安市東平県にある農村部の夏謝小学校と東平州城道孫崗小学校、続いて東原実験小学校への訪問が強く印象に残っています。中国語の“実験小学校”とは、いわゆるエリート校で、東原実験小学校もとても恵まれた教育環境にありました。優秀小学校という名称にすると国民の反発を招くので、“実験”小学校と呼ばれているようです。これらの小学校視察では、改めて様々なことを振り返り考える時間をいただきました。

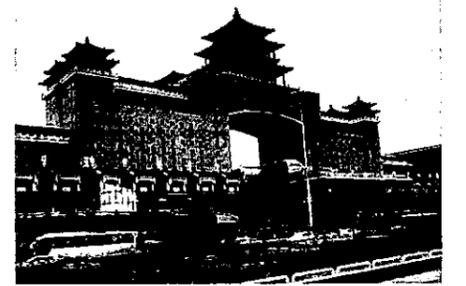
実際に子どもたちの様子を見ることができたのは、夏謝小学校、東平州城道孫崗小学校でした。校舎は古く、お世辞にも教育環境に恵まれているとは言えない状況でしたが、中国宋慶齡基金会と日中国際教育交流協会が贈したキーボードが使われており、嬉しい気持ちになりました。まず驚いたのは、低学年も高学年も授業規律が本当によく整っていたことでした。それも押し付けられた規律ではなく、自ら望んで学習に向かっている様子でした。子どもたち一人ひとりが真剣なまなざしで授業に臨んでいる姿を見て、国が違っても子どもたちが秘めている可能性は一緒であると感じました。また、東原実験小学校では子どもたちの姿を見ることはできませんでしたが、開催された第3回日中音楽教育交流会では、交流会の会場である会議室に掲げられているスローガンを発見しました。「教師の最大の幸せは、子どもの成長を見られることだ」という意味であると聞き、教師の喜びはどこの国でも共通であることを実感しました。そして、3つの小学校で共通して感じたことは、教職員の皆さんについて上手く表現できませんが「ああ、学校の先生だな・・・」と、私たちと何か共通するものを感じました。子ども



今まで海外へ行ったことは何度かありましたが、中国へは行ったことがありませんでした。今回縁あって訪中団に参加をし、大変貴重な経験をさせていただきました。また、「中国ならではの」を経験し、人としても少し成長できたのではないかと思います。4日間を通して、日本と中国を比べてみて思ったこと、感じたことを書いていきたいと思ひます。

まず思ったことは、中国は何もかもが大きいということです。空港に着陸してからもターミナルに着くまで数分間走っていました。さらに税関を通ったあと、荷物を受け取るために、電車に乗ること数分。日本では荷物を受け取ってから電車にのることはありますが、荷物を受け取るために、別の建物に移動しなければならないとは、さすが中国だと思ひました。

北京をバスで移動中、写真の建物が見えました。大きい、そして上には天守のようなものが。ホテルか何かかと思ひていたら、駅であると教えてもらいました。日本の駅とは大きく異なっていることに驚きを隠せませんでした。何度見ても駅には見えません。



他にも中国はセキュリティが厳重だと思ひました。空港はもちろんのこと、駅、美術館、迎賓館など、様々な施設の入り口にはセキュリティチェックがありました。入るのに時間がかかります。日本では、時間ぎりぎりに到着しても、駆け込み乗車ができますが、中国ではそうはいかないなと思ひました。中国で生活することで、時間に余裕をもった行動がとれるようになると思ひました。

そして何よりも印象に残っているのはトイレです。噂で聞いていた中国のトイレ事情をこの目で見ることができました。壁も仕切りもないオープンなトイレ、隣との仕切りは少しあるけど、どう考えても高さが足りないトイレ、トイレトーパーが個室の外にあるトイレなど、日本では考えられないようなトイレを見ることができました。改めて、日本のトイレは本当に素晴らしいと思ひました。

4日間という短い時間でしたが、中国に来たからこそ、中国、日本のすばらしさを感じる事ができました。今後も交流を通して、それぞれの国がさらに発展していくことを願ひます。